



TITLE:

ヴォルフガング・ボルヒェルト

AUTHOR(S):

若林, 光夫

CITATION:

若林, 光夫. ヴォルフガング・ボルヒェルト. 報告 1952, 1: 47-57

ISSUE DATE:

1952-12-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/185857>

RIGHT:

ウォルフガング・ボルヒェルトについて

若 林 光 夫

は し が き

様に思われ、そして既に死亡したためにその全貌を略、窺うことのできる作家を取上げて検討して見たい。

一

第二次世界戦後のドイツ文藝界の情勢はまだ判然としていないが、現在活躍している作家達は、戦前から著名であつた者の復活した者、以前餘り注目されていなかった者が戦後の精神様相の變化と共に注目され活躍している者、及び戦後新しく現れた作家達に三分出来る。この中前二者は別として戦後の新作家中既に名聲の確立した作家はまだ殆んど認められない様だ。彼等の多くは第一次大戦後の新しい作家の多くと同様忽ち忘れられる運命にあるのだろう。併し戦後七年の今日に到つてもまだ表現主義の様な新しい文學運動が起つていない事は、ドイツが東西に二分された様な政治的理由に由る所も大いにあるだろうが、それよりも今回の大戦によるドイツの精神的打撃が生易しい一夜つけの理念では到底超克できるものでなく、深い沈潜と長い探索の後に始めて曙光を見出せる程の根柢的なものであるからだろう。従つて新しい作家達の出現と検討は今後の課題として残さるべきであらうが、私はここで一人のある意味で今後のドイツ文學の一方面を暗示する

ウォルフガング・ボルヒェルト (Wolfgang Borchert) は一九二一年ハムブルクに生れ、一九四七年バーゼルの病院で死んだ。彼の家庭両親等に就ては據るべき文獻がないので明らかでないが、作品等から察すると幾らか生活に餘裕のある市民の家庭であつたらしい。又戦争に召集されるまでの傳記に就ても、彼が文學好きで十六歳頃リルケに傾倒し、詩を作つていたことや、演劇の方面に幾らか關係していたことしか判らない。要するに彼は文學好きの近代的都會青年で、政治には無關心な、併し敏感に近代の苦惱を感じ、かなり人文主義的教養を具えた青年であつたらしい。若し彼が何事もなく成長したら或は新劇や映畫の演出家にでもなつたことであらう。併し運命は彼を戦争の厳しい試験に引出しいためた。戦争は彼の肉體を不治の病に陥れると共に、精神から不純なものを焼き盡してしまつた。

まだ二十歳に充たぬ若い身で召集された彼はこの戦争の無意味と非人道性を感じていた。兵營から發した手紙の中の反戰的言辭のため告發されたがまだ逮捕されぬ中にロシヤの第一線に立たされ、無數の人命が無限に廣いロシヤの土に空しく吸込まれて行くのを見た。彼も負傷して入院し、そこから重い黃疸とジフテリヤの熱に悩まされながらニュルンベルクの牢獄に移され、死刑の求刑を受け、六週間生死の不安に苦しみながら獨房生活を送つたが、死刑を免れ半年の拘禁の後再びロシヤの最前線に引出された。併し病がまだ癒えていなかったので再び兵營に戻され、前線慰問團に配された。そして出發の前日再び仲間の密告により捕われ、ベルリンで九ヶ月牢獄生活を續けた。その間囚人のためには防空壕もない中で絶えず空襲にさらされた。しかも彼の病は少しもよくならなかつた。併し幸に彼は一九四五年春獨逸に移され、そこで終戰を迎えて釋放され、病の身を徒歩で食うや食わずの状態で遙々數百料の道を故郷に辿りついたが、彼の病はその時既に不治の段階に達していた。間もなく病床に就いた彼はそれから約二年間、不治の病の床から、絶えず眼前に迫る死に捉えられない中に、持てるものを語り盡さうとする様に、高熱と苦痛を冒して、生命を燃やし盡す創作活動を不斷に續けたのであつた。

II

彼の作品はすべて一九四九年ロヴォルト社刊の *Das Gesamtwerk* 一巻四二〇頁に納められている。遺作集中の數篇を除けばすべて一九四〇年以後、殊に散文作品は殆んどすべてが戰後の作

品である。全集の構成は、

- 1) *Latene, Nacht und Stene. Gedichte um Hamburg.*
一九四〇—四五年の詩集。
- 2) *Die Hundblume. Erzählungen aus unseren Tagen.*
一九四一—六六年の短篇集。『Die Ausgelieferten. Untwegs. Stadt, Stadt: Mutter zwischen Himmel und Erde.』の三部からなり、一九四七年春出版。
- 3) *Draussen vor der Tür. Ein Stück, das kein Theater spielen und kein Publikum sehen will.* ボルヒェルト唯一の劇で一九四六年晚秋數日の間に書上げられ一九四七年十一月に出版された。
- 4) *An diesem Dienstag. Neunzehn Geschichten.* 一九四六年暮から翌年夏迄に書かれた短篇集で、一九四七年末に出版。
- 5) *Nachgelassene Gedichte. Nachgelassene Erzählungen.* この全集に始めて集録されたもので、以前の集に洩れたもの、及び死の直前に書かれたものを含んでいる。

即ち二十九篇の短詩と、一篇の劇を除けば、他はすべて短篇小説で、その中でも散文詩、或はスケッチと云われるべきものが多

III

*Ich möchte Leuchtturm sein
in Nacht und Wind——*

für Dorsch und Stint,
für jedes Boot —
und bin doch selbst
ein Schiff in Not.

彼の詩集の扉に誌されたこの詩こそ、彼の文學を象徵するものである。暗夜と風の中に行手を見失つたボート、それは近代の不安の中を去就を知らずさまよっている人間である。彼自身も難破に瀕している船の如く甚だ頼りにならない。併しそれだけに彼は同じ不安に悩む近代人の心情がよく判る。そして自らの微力を自覺しながらもさまよえる人々に一抹の光明を與える燈臺の様でありたい。

神を失い、存在の問題性を感じて危機感に戰っている人間の姿、これは彼自らその一人である現代人の様相である。彼は自らその不安に戰きながらも人々にせめて平安の一刻を與えたいと願う。はかない夢に耽り、或は幻滅と絶望に陥つた人達を仄かな光を以つて暖く包みかりそめの慰安を與えるが、自らも一陣の突風が來れば忽ちに消え去る街燈に過ぎない。そして彼の描く人達は大都會の巨大な建物の間に押しつぶされそうに生き、舗石の間に僅かに芽を出している雜草の様な多くの小市民である。或は遠國に出た男達を一日千秋の思で待つてゐる船員の妻や、夢の様な情熱の一夜の後に棄去られる娘達である。彼等は自分達の存在の儚さを自覺せず、頼むべからざるものを頼みとして味氣ない日々を送っている。彼らの享樂といへば、僅かに大衆向娛樂場の安價な娯みであり、或は場末の酒場での安酒の酔であり、夕食後靜かにく

ゆらす一服のパイプにすぎない。この様なハムブルクの庶民と、その背景をなす港やエルベ河の情景、灰色の大都會と、港に出入する大船、小舟の汽笛、濁つたエルベの河水、アルスターの内湖、うすぎたない運河、河岸と浮棧橋、そこに降る冷たい雨と風、そしてそこに展開する儂い愛慾の戯れ、これが彼の詩集にうたわれている對象である。そしてこれが彼の文學の出發點でもあつたのだ。

四

ボルヒェルトの本領は併しこれらの幾分センチメンタルな殘滓を持つてゐる詩にはなくて、戦後筆を染めた短篇にこそあるといつてよい。前にも述べた様に戦時中に経験した冷酷な運命は彼の胸中の不純な、生半可なものをすべて燒き盡してしまつた。最初の短篇集 *Die Hundelune* はそれらの假藉なき運命によつて痛切な體驗となつた、存在の問題性との血みどろな對決を描いた作品の集である。

この集は三部に分れ、第一部は *Die A. geüferten* と題され、運命の前に無力に立たされ、何一つ頼るべきものを持たぬ人間の姿が描き出されている。この集全體の表題にもなつてゐる *Die Hundelune* という作品は彼の牢獄生活の體驗を基として、外界から隔絶され、唯一人自分とのみ對決を迫られる獨房の囚人の不安と孤獨、人間味のない監守やもはや自尊心を失つて木偶の様になつてゐる同囚への反感、その中で偶然一輪の「たんぽぽ」を見つけて、そこに自分の人間味を發見する囚人の心理が、ユー

モアを交へて描かれている。この作は彼の短篇中でも最も落着いた文體で書かれていて構成も相當に確實であり、彼がこの作でデビューした時大いに好評を得たのも一つともである。

次は此の世の中に何一つ頼るべきものもなく又何一つ所有しない放浪者を描いた、*„Die Kräh'n fliegen abends nach Hause“*で、河岸に宿るべき家もなく野宿している浮浪者達の孤獨な淋しい諦め切つた姿が圍りの風景と巧みに調和した雰圍氣を以つて寫されている。その中のまだ少年の様なうぶさを持つている一人が、唯一つの寶である赤いマフラーを與えた戀人の街の女にふられて、言様のない味氣なさの中で、ねぐらに歸る鳥を羨むのを、中年の浮浪者が慰める。やり切れない様な氣分を見事にとらえたスケッチである。

次の *„Stimmen sind da—in der Luft—in der Nacht“* も同じく彼の氣分描寫の巧さを十分に味わせる、散文詩の様な文體のスケッチである。晩秋の暮方僅か數人しか客のない市電の中で敗戦の苦痛は自分だけが知つているのだと云いたげな中老の男がいやに深刻振りながら、若い者達の冷たさを非難するが、そこに乗合せている復員の青年の姿や態度は、その様な饒舌を不可能ならしめる程に、運命を靜かに甘受するものであつて、彼がどれ程きびしい運命にさらされたか、しかもそれを敢えて避けようとしていないことを示すのである。

存在の問題性を直接の對象として取上げたのは：*„Geschichte über den Dä h e r n“* である。著者を偲ばせる敏感なインテリ青年ががつちりとした行動的な青年を相手に、殆んど獨白の形で、

人間存在の意義を追求する。神を失ひ、人生への素朴な信頼を失つた近代人、殊に戰爭によつて不合理と非人道の跳梁を経験した若人達にとつて、人生は全く偶然な運命の前に無力に投出された餌にすぎない。「俺達は時の流の中の浮草だ」「無數の叫びを藏し無數の顔を持つ日々に、無防備な柔い一片の心臓をもつて引渡されているのだ」「俺達を支配する、全く當てにならない偶然という神、冷酷で強力な偶然が酔拂つて世界の屋根の上で踊つている。そして俺達、信じ易い俺達は、理由のない信頼をもつてその屋根の下に居るのだ」。だから「俺達は到る處自分の死を待歩きながら、愛撫の戰慄の中に我を忘れ、死を忘れるのだ」。この様に我々は全く無力に運命の前に投出されているが、しかも尙我々は人生を愛する。「人生を俺達は信ずる、死の眞只中にある俺達だが」「首をくくる？ 俺が？ 俺が首をくくるつて？ とんでもない！ 貴様は判らないのか、俺がそれでもこの人生を愛することが判らないのか？ 俺はこのすばらしい、熱烈な、無意味な狂氣じみた、譯の判らない人生を、汲み盡し、飲み盡し、嘗め盡し、味い盡し、絞り盡すつもりなのだ。我々が生きて行く意義は今判らない。併し何日判らないとも限らない。「何故ならいつか思いがけない、豫期しなかつた、偉大な、新しいものが來るに違いない」という豫感が我々の中に否定しがたく存しているからだ。従つて運命の意義づけは我々自身との對決の結果我々の中から生れて來ねばならない。かくて存在の根本問題は我々自身の中に存することが明らかになる。これがこの作品の中で展開されたボルヒェルトの根本認識であり、ここから、人間存在の意義づ

けの努力としての彼の作家活動が生れて來てゐると考えてよいだらう。この意味に於てこの會話は特に重視されるべきであると思われる。

第三部 „Unterwegs“ に納められた作品はすべて、人生に於ける萬事は無常で流轉しざることをテーマとしたものである。その中特に注目すべきものは、„Generation ohne Abschied“である。感じ易い若い身空で一瞬の後の生命も保證できない戰場に引出され、柔かく感じ易い心を抱いて居ればこそ、一層別離の悲哀に耐えかねて、すべて愛しなつかしまれる物事から、そつと別れを告げずに逃去さずには居れない、ボルヒェルト自身と同じ年代の青年の氣持を描いたもので、一見冷たく非人情に思われるために世人の非難を蒙る彼等こそ、實は暖く傷き易い心情の持主であることを示している。そして徒らに騒立てる人達からは何の將來も期待できないが、無常な現實をじつと耐え忍ぶ彼等青年からこそしつかりとした不動のものが生れ出ることが期待され得ることを説いている。この作品は發表されるや彼と同じく若くして戰爭に驅出された青年達から、彼等の氣持を最も正しく代辯して呉れたとして、熱烈な支持を受けたということである。

第三部 Stadt, Stadt: Mutter zwischen Himmel und Erde は彼の生れ育つた町であるハムブルクをテーマとした作品を集めたもので、偏狹な愛郷心で美化することなく、その町の持つ矛盾や汚濁、悲慘と不合理から目をそむけることをせず、しかも尙この町を愛せずには居れない氣持を表わしている。この點でも彼は „Gespräche über den Dächern“ の中で存在の問題を論じたの

と全く同じ態度で故郷の町に對している譯である。この第三部の中で注目すべきは「ビルブロック」という作品で、これは空爆に破壊されたハムブルクの町をカナダ空軍の兵士が勝者の颯爽たる氣持で見物に出かけるが、歩いて行くにつれて甚だしくなる破壊に漸次壓迫され、遂に餘りにも慘憺たる有様に、いつの間にか耐えられない良心の苛責に驅り立てられて逃げ出し、ホテルに歸つて、二匹の牝牛が失われたことはそんなに悪いことではないと平和な故郷に手紙を書く話である。破壊の慘狀がひどくなるにつれて明朗な兵士が壓迫され遂に耐えられなくなる心理の變化が巧みに描かれてゐると共に、素朴な人間の心にヒューマンズムの精神が呼び起されることを示していて、そこには勝者に對する敵意もなければ、敗者の卑屈も認められない。この作品はラヂオで朗讀され非常に好評を博したということである。

五

ボルヒェルト唯一の劇 „Draussen vor der Tür“ は、一九四六年晩秋、彼の死の一年前、病床にありながら、寢食も忘れて僅か數日の間に書上げたものであつて、初めから上演することは念頭になかつたため、自由に舞臺の約束を破つて書いたという意味と、その内容が餘りにもきびしく眞實を語つてゐるから、娛樂を求める、觀客を相手にしている劇場は決して上演しないだらう、という意味で、「上演する劇場もなく看客も見ることが欲しない劇」という副題を自ら附している。

この劇を書くまでとその後ではボルヒェルトの態度に大きな變

化が起つてゐる。存在の不合理性を認めつつ、尙何か新しい秩序の様なものに希望を抱くという思想は、前にも述べた様に彼の作品を一貫しているが、今まではそれは専ら内に向つて、即ち自己の立場の確立という方向に向いてゐたのが、この作品以後では世人に訴えて新しい世界を生み出すには到らない迄も、以前の過誤を再び繰返さない様にしたいという外向性が強く感じられる様になつて來た。それというのも戦後僅か二年足らずで戦争の惨禍を忘れる徴候が既に現れはじめたことを見ると共に、彼の健康状態がもはや永い餘生を彼に許さないことを自覺し、短い餘生の間にせめて聲を大にして人間の覺醒を叫びたい氣持になつたからだと思われる。彼のその後の作品には従つて廣い意味で政治的な意圖を明白に含んでいるものが多くなつた。この劇もこの類の作品の最も強烈なものの一つであつて、彼等の年代の人達の運命を假藉なく描き出して、よりよき世界の出現を要望する心からなる絶叫といつてよいであらう。

この劇の主人公元下士官ベックマンは戦傷のため跛になり、戦後ロシアに抑留生活を送つた後復員した青年であるが、彼は又同じ運命に遭遇した彼と同じ年代の青年の象徴でもある。彼等は幼少の時から戦争を美化し讃美し、青年に愛國心を鼓舞する教育のみ受けて來た。そして戦争が始まるとその怖ろしさも知らされずに勇躍して死地に赴いた。所が生死の間を彷徨してやつと歸つて見ると、世の中は彼等には冷たかつた。しかも世間は彼等を戦争に驅立てたことには何の自責をも感じていない。ここに彼等は自分達の運命を世の中に訴え抗議せざるを得ないのである。

この作品の筋を追つて行く前に云つて置かねばならないことは、前にも觸れた様にこの劇が芝居の約束を破つて、自由に「神」とか「死」或は「鏡人」に於ける様に、主人公の分身を登場させていることである。其他の點に於てもこの作品は表現主義の劇と似た點を多く持つてゐる。

復て復員したベックマンは自宅に歸つて見ると妻は仇し男と一緒にになつてゐる。彼は絶望してエルベに投身する。エルベ河の精は「お前は苦勞を足りないから死ぬ權利はない」といつて追歸す。エルベ河の泥の中で倒れている所を夫が未復員の若い女が救つて家へ連れて歸る。そこへ片足を失つて松葉杖をついた夫が歸つて來て、前日の彼と同じ様に絶望して投身する。ベックマンも耐えられない氣持でその家とび出してエルベ河へ行こうとする。すると彼の分身が現れて彼を引止める。戦争中偵察隊の指揮を委ねられたが、その中の十一人が戦死したことに對して深く責任を感じ夜も眠れないベックマンは、彼に命令を下した大佐にその責任を返しに行く。妻子と共に豊かな生活をしている大佐は自分の部下が多く死んだ事には少しも責任を感じていないので、ベックマンが夜毎に血まみれの將軍が義手で、骨で作つたシロフオンを狂氣の様にたたく夢を見て眠れないといつても、眞面目に取上げないで、君はその格好で見世物に出たら成功するよと茶化してしまふ。ベックマンは腹を立てて食卓のパンと酒を奪つて逃げる。そして一杯氣嫌になつてキャバレーの支配人に會つて出演させてくれとたのむ。支配人は初めは興味を感じたが、彼の姿が餘りに悲惨なので、看客は娯樂を求めないのであつて、眞理を求め

ているのではないといつて斷わる。ベックマンはまた絶望するが分身に注意されて両親の家を訪れる。するとそこには他人が住んでいて、彼の父は餘り親ナチ的だったので戦後迫害されて母と共にガス自殺をしてしまつたと告げ、彼に安價な同情を示すが、それだけのガスがあつたら一ヶ月以上も炊事ができたのにと惜む。

これを聞いたベックマンはすつかり絶望してエルベ河へ急ぐ、彼の分身は必死になつて彼を引止めようとして、人間は本來善良なのだから信頼せよと説く。そこへ今迄の主要人物が次から次へ登場するが、誰もベックマンを本氣になつて救わうとはしない。神も弱々しい老人の姿で登場するが、今は誰もわしを信用してくれないと歎くのみである。唯死のみが收穫の多いのに大満足である。これを見て分身もはやベックマンを引止める言葉を知らず、ベックマンは死んでしまふ。

この作品で最も印象的なのはベックマンが大佐に物語る、血まみれの將軍が義手で白骨のシロフォンを狂氣の様にたたく夢の話と、彼が死に追やつた復員者の松葉杖の音が「トックトック」とどこまでも彼を追つて來る場面であらう。

第一次大戦後復員者の悲劇を扱つた作品中私の印象に残つてゐるのは、トララーの「ヒンケマン」とフランクの「カールとアンナ」であるが、兩者共に、人命喪失に對する強い責任感や、復員者を迎える世間の表面的な同情の下に潜む冷酷さと、戦争讚美によつて青年たちを残酷な戦場に驅り立てた人達の無反省をこれ程鋭く衝いては居ない。第一次大戦後のドイツは、戦場にならなかつたことや、東西に分割されず、又戦争に参加した者を英雄視する風

潮が残つていた點に於て、今回の大戦後と比較すれば遙かに凄じ易かつたであらう。今度は戦後革命を起す様な夢を抱く餘裕もない程のきびしいものであつた様である。それだけにこの作品のきびしさが判る様に思われる。

この作品は彼の豫想に反して、各地のラヂオで放送され、又彼の死の翌日ハムブルクで初めて脚光を浴び、その後多くのドイツの舞臺にかけられてセンセーションを煮き起したということである。

六

この劇と略、同時の一九四六年秋から翌年夏迄の間に書かれた短篇を集めたものが、*An diesem Dienstag* と題された短篇集である。この集に納められた作品は内容から大別すると、最初の短篇集のと同傾向の存在の問題を中心としたもの、次に劇に於て表面化した戦争の惨禍とその防止を訴えようとしたものに分れ、更に文體や構成の上から見て、劇に於て見られた表現主義的手法が散文に於てかなり自由に驅使されたものがこれに加わつてゐる。この最後のものは冷靜な藝術上の主張から試みられたというよりは彼の病が進行して、屢、高熱の中に一種の幻想を抱いたその經驗をそのままに手法としたものではないかと思われる。この意味で最も注目さるべき作品はこの集の最後に納められた、*Die lange lange Strasse lang* であつて、恐らく彼が終戦後病を冒して徒歩で數百料の遠路を殆んど食物も得られずに故郷へ歸つた時の經驗と、熱に浮されて惡夢を見た時の何かに追かけられながら何一つ自分の思う様にならない感じが、どんな時にも抜けない

戦死した戦友達に對する責任感と共に描き出されたものと考えられる。

この種の作品を除けば他は直接に戦争を描いたものを主とした „Im Schnee, im sauberen Schnee“ と題する第一部と、銃後及び戦後のエピソードを描いた第二部 „Und keiner weiß wohin“ に分れている。第一部は戦線に居る兵士達を中心として、戦闘そのものよりは兵士の心理的な動きを主として描いた作品からなり、そのねらいは恰もカロツサのルーマニヤ日記の様に、殺伐な日々を送っている兵士達にも、その皮を一枚剥けば、人間らしい苦惱や愛情が潜んでいることを示すことにある。唯カロツサの場合その描寫が如何にも落ついた客觀的手法を用いて、主觀的要素が極力抑えられているのに對し、ボルヒェルトの場合は抒情的従つて主觀的要素が強く表面に現れている。何の怨みもない敵を命令によつて殺さねばならない兵士の氣持を描いた „Die Kugelbahn“、敵の集中砲撃を受けて壕の中で縮こまっている兵士の恐怖を描いた「四人の兵士」、二月の深い雪に埋れた静まり返つた前線でクリスマスMASの歌を聞き恐怖におそわれて歩哨の所へとび込んで来る下士官を描いた „Der viete, viele Schnee“、參謀が地圖の上に引いた赤鉛筆の線上にあつたために焼拂はれる村の話、そして前線と銃後で同じ一日にどれだけの多くのことが起り、雙方が如何に空しく愛したり苦しんだりしているかを描いた „An diesem Dienstag“ 等がこの第一部を形成している。

第二部は遅延した汽車を待つ間同じ車に坐つた、娘と詩人と配給所の役人と復員軍人とを寫し、娘が自殺した前後に、強いて無

關心を裝う戦後の人達の自己防衛的態度を描いた „Der Kaffee ist undefinierbar“ から始まり、銃後或は戦後すべてを破壊された人々の虚脱した様な無關心を描いた作品や、或はその様な人々の心の中に暖い感動を呼び起すエピソードを描いた作品を納めている。この第二部の中注目すべき作品は „Die Küchenruhr“ と „Nachts schlafen die Ratten doch“ である。前者は空爆で家も両親も失つた青年が機械のこわれた臺所時計をもつて來て、何事にも不感症になつて日向ぼつこをしている人達に、その時計が二時半を指してとまつている事が、彼の母を思出させる所以を話して聞かせ、あの時分は極樂だつたという、初めは取合わなかつた人々も深く心を動かされるという話であり、後者は空爆でこわれた家の下に埋れた弟の死體を鼠に嘲られない様に守ろうと徹夜の覺悟をしている子供を見て自分もすべてを失つて虚脱した様になつていた一人の男が、慈悲心を起して、鼠も夜は眠るよと欺して歸らせる話である。又極惡な死刑囚が實は非常に善良な氣質を持つている話や、道路掃除夫を永年やつて來た素朴な老人が、彼の職場から見た戦争の害惡を語り、息子が歸らないのを心配している妹に、何れ萬事はよくなるよと慰めて歸す、朴訥な小市民の姿を描いた作品等がある。

これらの作品は何れも戦争や社會惡に傷け歪められた人間も實は好ましく愛すべき人間性をそなえていることを示して居り、これこそボルヒェルトが存在の問題性への解答として提出したものと考へてよいだろう。

以上の作品集の他にこの全集には詩と短篇の遺作を集めたものが加えられている。その中詩の方は最初の詩集と略同時に作られたものを納めていて、特にそれと異つた點はない。短篇集の中には極く初期の作品で今迄除外されていた四篇と、最後の短篇集編纂後死の直前迄に書かれた三篇とが納められている。

初期の作品はボルヒェルトの傾向が初期に於てもやはり同じであつたことを示しているという意味に於て補足として見らるべきであり、それ以上の意味はない。それに反して死の僅か前に書かれた三篇は、今迄の作品の變容が更に押進められたものとして注目し得る。

前に述べた „Generation ohne Abschied“ がボルヒェルトと同じ年代の人達の氣持を説明辯解して理解を求めることを主たる目的としている様に見えるのに對し、この三篇中の第一篇 „Das ist unser Manifest“ は同じ年代の人達が今後如何に生きようかと考えているかを代辯し宣言する積極的な主張と見られる。

「敗戦によつて軍は解體したが、我々は戦争によつて何一つ永久的なものはないことを知り、何一つ心をつなぐべきものがないことを覺つた。我々が神とか徳とか呼んでいた物の背後に見出したものは氷の様に孤獨な自己だけである。我々が見出したものは自身、自分の愛と不安と希望だけだ。併し我々はあらゆる戦争の慘苦にも拘らず決して不感症にはならなかつた。我々は眞實を直視することを習つた。我々はだから頼むべからざるものを頼む様

な幻覺はすて去つた。併し我々は單に否定を事とするものではない。我々は虚無の中へ再び肯定を打建てようとする。我々は荒れ果てた祖國ドイツをその苦しみの故に愛する。又我々是我々の心をその不安と苦惱の故に愛する。我々は愛を宣言する。我々はこの狂氣じみた世界で再び、繰返し愛さうと思う。」

この宣言も亦 „Gespräche über den Dichten“ で取扱われた存在の問題性に對する解答である。An diesem Dienstagの集に於けると同様ボルヒェルトは存在の問題性を愛によつて解かうとする決意をここで明白に宣言として表明したのである。

次の „Lebensgeschichte“ は戦争が資本家の利潤追求、科學者の名譽慾、無反省な愛國心によつて起され、人命は物品の如く將軍達の間でやり取りされ、戦争が終つてもまたすぐに軍備がはじめられ、人間は遂に戦争のため極く僅かしか残らない、ということを表現主義の劇の様に簡潔な場面を連ねる手法によつて語つている。反戰的な戦争の暴露作品であつて以前の „An diesem Dienstag“ の線を今一步進めたものである。

最後の „Dann gibt es nur eins“ は、職工、事務員、資本家、學者、詩人、醫者、牧師、その他あらゆる人達に、軍備をはじめ命令が下された時には斷然「いやだ」と拒否せよ、若し拒否しなかつた場合にはすべては破壊され、人類は滅亡するぞ、と告げる全く檄文と云うべき反戰の作品である。

この様にボルヒェルトは死期が迫るにつれて、焦慮に驅られてますます烈しく反戰を主張したのではあるが、この反戰の精神は單純な人道主義から出たものではなく、存在の問題性、人性の非

合理性を十分認識した上に、尙かかるものとしての人間への愛から發したものである。そこに我々は彼の反戦が現在多く唱えられている反戦論よりも一段深い基盤の上に立つてゐるものであることを感じる。

八

ボルヒェルトの作品中最も價值のあるのは、短篇である。彼の詩はそれ程すぐれたものではない。併し私はやはり彼を抒情詩人と呼びたい。それは彼が本來の詩に於て抒情詩人として立派なものを作つたという意味ではない。それよりも彼の短篇が抒情的雰囲気包まれていて、そこからそれらの作品の人に訴える力が生れて來ることを云つてゐるのである。即ち彼の散文は敘事作家の客觀的態度を持つことが少く、むしろそこに物語られてゐる事柄が、それを包む情緒的雰囲気によつて生かされて來てゐるのである。

彼の短篇は必ずその物語りの起る場面の情調を描き出すことから始まつてゐる。その際彼は殆んどどこに手を變へ品を變えて雰囲気を作り出す。そこには殆んどわすらしい程の類似した形容詞が、恰も油繪の具を幾重にも重ねる様に積上げられる。こうした手法によつて描き出される雰囲気は、單なる客觀的描寫とは違つて、専ら情緒的に我々をその中へ引込んでしまふ。そのボルヒェルトの散文の魔法があるのだと私は思う。„Stimmen sind da in der Luft in der Nacht“, „Die Krähen fliegen abends nach Hause“, 等は、この手法が最も成功した散文詩の樣

な感銘を與える作品である。従つてボルヒェルトのわらつてゐるのは客觀的具體性ではなくて、主觀的抒情的具體性である。

前にも一寸觸れて置いた表現主義的手法、殊に „Die lange lange Straße lang“ に屢々用ゐられる、文章の意味の流れを追ふよりも、頭に浮んで來ることをその儘に書きつけるやり方も、やはりこの様な主觀的眞實性を追求する態度であるだろう。次にその一例を掲げよう。

Ich fahre mit der Strassenbahn, der guten gelben Strassenbahn. Wo fahren wir hin? frag ich die andern. Zum Fussballplatz? Zur Matthäus-Passion? Zu den Hütten aus Holz und aus Hoffnung mit Tomaten und Tabak? Wo fahren wir hin? frag ich die andern. Da sagt keiner ein Wort. Aber da sitzt eine Frau, die hat drei Bilder im Schloss. Und da sitzen drei Männer beim Skat nebendran. Und da sitzt auch der Krickenmann und das kleine Mädchen ohne Suppe und das Mädchen mit dem runden Bauch. Und einer macht Gedichte. Und einer spielt Klavier. Und 57 marschieren neben der Strassenbahn her. Zickzackeijupheidi schneidig war die Infanterie bei Woronesch heijupheidi. An der Spitze marschieret Leutnant Fischer. Leutnant Fischer bin ich. Und meine Mutter marschieret hinterher. Marschieret 57 millionenmal hinter mir her. Wohin fahren wir denn, frag ich den Schaffner.

其他にもかなり表現主義的手法を用ゐてゐるが、それはボルヒェ

ルトの藝術様式が表現主義と同じく主觀的文學様式であることから自然に生じた結果であると思われる。

若くして死んだこの純粹な作家、ウォルフガング・ボルヒェルトには多くの未完成な點はあるが、その若さの故に、又餘生の短かいことの自覺の故に、焦燥は感じられるが、純粹に讀者の心をうつものがある。戦後どんな作家が現れたにしても、彼を無視することは現代ドイツ文學を見て行く者としてできないと私は感じたのでこの紹介の一文を草した次第である。

(一九五二・九・六)